

「一隅上がれば、三隅上がる」と熱く語る「初代所長講話」

去る6月30日(火)に所内研修として島尻教育研究所の初代所長宮城恒彦氏を講師に「一隅上がれば」と題して講話を頂きました。

実際の体験を交えながらの80分の講話は、子ども自身も気がつかない長所や美点を探し、自他に認めさせ、生かすことが教師としての重要なつとめであり、教育の究極の目的はそこに存在するかもしれないとお話しなされ、長きにわたり一人一人の子ども達を大切にしたい、教師としてのプロ意識と子どもへの愛情溢れる思いのこもった熱きメッセージとなりました。



写真1 初代所長講話



写真2 研究員とともに

【講話の概要】

◆ 最近思うこと

- 1 教師の道を歩んできてよかった。
- 2 郷土文化に誇りと自信をもつ。
- 3 真の国際化とは何か。
お互いの文化の交流
- 4 日本人の民族性を考える。
「イギリス人は歩きながら考える。(修正できる) フランス人は考えた後に走り出す。(熟慮する) スペイン人は走った後で考える。(反省する)」()は宮城氏挿入
笠 信太郎「ものの考え方」から
☆さて、日本人は・・・

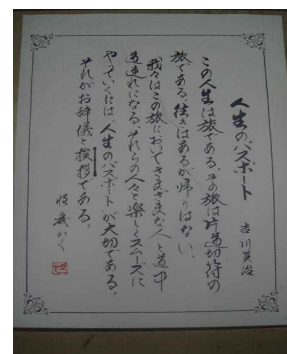
◎教育の10のメニュー

- 1 目指すものは一つだが進む道程は教師の数だけある。
- 2 経験年数によって積み重ねていく研究の層は異なる。
(1) 真似る・・・モデルになる先輩を探して学ぶ。0～5年
(2) 広く経験する・・・校務分掌・へき地経験など。6～10年
(3) 自分のものを造る・研究領域を絞る。11～15年
(4) 自己の確立・・・「このことはOO先生に聞け」16～20年
(5) 後輩に後ろ姿で教える 21年～
- 3 学校での教育問題の解決をにぎる鍵は「この子たちのため」という一言に尽きる。
- 4 教育は飯櫃の中の米粒を箸で一つ一つ丁寧につかむようなもの、愛情と忍耐とを要する。
- 5 学級の子は教師にとって「私のクラスの一員」、教え子からみれば「私の先生」
- 6 教師の一言が凶器にも、カンフル剤にもなる。
- 7 「一隅上げれば三隅上がる」その子の一隅を見つけることに努力すること。
- 8 その子の学校生活・家庭環境をよく把握する
- 9 好かれる教師は子どもの名前を多く覚えている。名前はその子に入っていく入口。
- 10 現役時代から複線の道を見つけるように努力する。

＜一隅上がれば、三隅上がる＞

立方体の一つの隅を引き上げると、それに連動して他の隅も自然に動き出し、しまいにはそのもの全体が上がる。

宮城恒彦氏から参加者全員へのプレゼントの数々



教育研究員の感想 (研修日誌から)

今日は初代所長である宮城恒彦先生からご講話をいただき、大変貴重な時間となりました。入所の際の色紙での激励に始まり、戦争体験記、今日の一人一人への資料の準備と、恒彦先生の私たちのような若い教師に対してまで向けて下さる真心に感謝の気持ちでいっぱいです。渡嘉敷での宿泊研修を終え、沖縄のことについて深く知らないということに自覚したところですが、今日の先生のお話の中からも、郷土文化に誇りを持ち、足元を見る大切さを痛感しました。また、「子どもにとっては教師は1対1」「教師の一言が武器にもカンフル剤にもなる」ということから、教師の何気ない言動が、子どもの人生に影響を及ぼすということについて深く考えさせられました。そして、「一隅上げれば三隅上がる」ということから、その子らしさ、良さを見つけ認め、周囲にも知らせていくことが子どもをいかし、伸ばしていくことになるということ学び、今日の恒彦先生のお話を胸に刻み、教師として人として向上していきたいと思いました。

(金城さくら)

今日は初代所長の宮城恒彦先生の講演がありました。先生の教育に対する熱い思いと郷土沖縄を愛する強い思いを感じました。先生の講演の中で、いくつも参考になることがありました。

①教師の言葉は子供を傷つけることもあり、子供のやる気に火をつけることもある言葉のもつ力、「言霊」ってあるんだなと感じました。②教師から見たら1/30だが児童から見たら1対1児童全体を見つつも個としての児童を尊重する大切さを感じました。③郷土沖縄を愛する心、平和を愛する心をはぐくむことの重要さと教師として児童に伝えていきたい大切なものだと感じることができました。

郷土を愛し平和を願う思いと子供たちに対する思いが恒彦先生のパワーを生み出しているように感じました。

(大城厚)

宮城恒彦先生には、これまで入所式の際の色紙や戦争体験記、素敵なメッセージ等を頂き、いつでも励まされています。達筆な字で私の名前を書いて下さっているため、世界に1つしかない宝物になっております。恒彦先生の私たち教師一人一人に対する深い愛情を感じます。

今日の講話の中で学んだことは、地域のことを深く理解し、世界のなかに生きる一人として視野を広げること、子ども一人一人に目を向け、子ども理解に努めること、子どもを認め励ますような教師の言葉かけや姿勢の大切さ等です。学級全体を上げられるように一隅を上げられる教師になるよう、ここで視野を広げ研修を積んでいきたいと思えます。

(長門照乃)

宮城恒彦先生のお名前はよく耳にし、本を何冊か頂いていますが、実際に講話を聞くのが初めてでした。5月の宿泊研修で渡嘉敷島に行き、慶良間諸島における戦時中の様子や集団自決について、また慶良間諸島の海の美しさや渡嘉敷島の歴史文化について学びました。その時にもそれぞれの地域における歴史・自然・文化について学ぶことの大切さを感じましたが、今日の講話を聞いてより沖縄の歴史や自然・文化を知ることの大切さを感じました。今、勤務している南城市の歴史や自然・文化について調べてみたいと思えます。また、「教師の10のメニュー」の項目のどれをとっても教師にとって大切な要素だと思えます。私はその中からまずは、4つ目の「政治の要諦は(中略)その為には愛情と忍耐とを要する。」ことから実践してみたいと思えます。忍耐が私には足りない気がします。特に「忍耐」という言葉を頭の中に入れて子どもたちと関わっていききたいです。「一隅上げれば、三隅上がる」この言葉を初めて聞いたと思えます。その話の中で、ある学級の学級経営の担任の先生が宮城末義島尻教育事務所所長と聞いて、びっくりしました。2年前に宮城所長から「『これだけは誰にも負けない自分の武器』を持ちなさい。」と言われたことを思い出しました。自分の武器をまだ探している途中です。研究所にいる間に見つけていきたいです。

(具志堅智美)

恒彦先生には、入所初日から色紙をいただき、戦争体験記や習字の手本など、いろいろな場面で支えてくださったり見えない部分で指導して下さっていたので、今日の講話ではどのような話が聞けるのかを楽しみにしていました。

最初に人生のパスポートという資料と照らし合わせながら、おじぎ・挨拶の大切さを話していただき、当たり前前かがや当たり前前できなくなってきたのかと感じました。このようなことを学ぶ場は、まずは、家庭にあるべきだと思いましたが、学校でも生徒たちに教えなければいけないとも思えます。本校では、職場体験があるので、この当たり前前かがや当たり前前ができる生徒をしっかりと育てていきたいです。

先生の話の中で一番印象に残ったのが教師にとって生徒は1/30であっても、生徒にとっては1/1であることです。1対30という認識ではなく、常に1対1で接していることを意識して、学習指導等に当たっていきたくです。

(古屋誠一)